

講演  
近代日本における進化論の受容と井上円了

鵜浦裕

uzumura hiroyoshi

只今ご紹介にあずかりました鵜浦です、よろしくお願ひ致します。今日は私のような未熟者にこのような機会を設けていただき、本当にありがとうございます。

それでは早速ですが始めさせていただきます。私は進化論を研究していると申しましても生物進化論の理論的研究しているわけではなく、進化論の受容史というものを中心に研究している者です。今日は「近代日本における進化論の受容と井上円了」というテーマで、大体六十分ぐらいお話させていただきますと思います。

いきなり近代日本の進化論受容というお話に入りましてもなかなか取っつきにくいところがあると思います。また今日は専門家の方々だけでなく学生の方々も来られていると聞いています。そこでまず、多少なりとも基本的なところから始めることにします。多分みなさんご存知だと思ふんですが、高等学校の生物の時間にダーウィンの進化論を習いましたか？ダーウィンの進化論を簡単にでも説明できますか？（学生からの「できる」という応答に対し）それならば必要ないかもしれませんが、念のため、最初に少しだけ進化論、特にダーウィン進化論とは何か、あるいは社会ダーウィニズムとは何かということについて説明したいと思います。

まず、ダーウィン進化論というのは、ダーウィンが一八五九年の『種の起源』、一八七一年の『人類の起源』と

いう二つの本で展開した生物の進化、種の変化に対する考え方です。それを簡単に説明すると、種の中にたくさん個体があつて、その個体が競争していく。何を競争するかといえば食料の獲得、それから自分の子孫を増やすという点で競争していくんですね。これを生存競争と言います。この生存競争の中では、優れた特徴を持つ個体が生き残ります。そのメカニズムを適者生存あるいは自然選択と呼ぶわけです。そしてこのメカニズムにより優位な変異が長い時間をかけて蓄積されていくうちに種は変化し、より環境に適した生物が生まれる、とダーウィンは考えました。しかも、このプロセスが無限に続くというのがダーウィンの考え方です。こうした考えというのはもちろん書齋で思いついたわけではありませんで、おそらくビートル号の航海中、特にラテンアメリカで生き残るために闘っている生物の姿を見て、と言いますか、いろいろな生物の生きざまの中にまさに闘いだけを見て、あのような考えを思いついたんでしょうね。闘いの結果は偶然ではなく、優れた特徴を持つものが生き残っている。そのことに非常に強い印象を受けたんだろうと思うんですね。ただ、なぜそういう闘いが起こるのかはその時の彼には分かりませんでした。ビートル号の航海から戻ってイギリスで研究しているうちにたまたま読んだマルサスの『人口論』に、彼はその理由を見つけたのです。食料生産の増加と個体数の増加、マルサスの場合は人間を扱っていますから「人口増加と食料増産」、この両者の間には時間の経過とともにアンバランスが生じる。マルサスの場合、そのアンバランスは大災害、飢饉、戦争あるいは疫病の流行という形で人口の減少に結びつく。結果として、人口と食料との間のバランスが取り戻されるわけです。それを讀んだダーウィンは、「個体数と食料とのアンバランスが生存競争につながる、そしてその生存競争の結果がマルサスが考えたものとは全然反対の進化という明るい未来につながるのだ」と言ったわけです。

これがダーウィンの進化論ですけれども、この進化論は発表されると同時にほとんど世界中に広がりました。

ヨーロッパを始めアメリカ、ラテンアメリカそして日本、韓国、中国あるいはベトナムあたりへ広がっていったわけです。

そのダーウインの考え方が出ると同時に、あるいはそれより少し前だという説もありますが、他方で社会ダーウニズムと呼ばれる思想も生まれました。

	社会の中の個人の間		自然にまかせた淘汰	人為的な淘汰
集団（国家、人種）の間	③	①	②	④

これも簡単に説明しておきますと、それは「ダーウインの生物観、自然観をそのまま人間社会にあてはめるという見方」でありまして、ここに簡単な類型表を書いておきました。例えば、①は人間社会の個人の間で生存競争が自由に行なわれるべきだというタイプの社会ダーウニズムで、具体的にはレッセフェール、つまり、自由放任主義経済を指します。政府の干渉をできるだけおさえ個人が自由に経済活動、経済競争を行なうことによつて、優れた人間が生き残り、経済全体に完全な調和が生まれるという考え方です。②は、社会の中で淘汰を人為的に行なうという考え方で、具体的には優生学運動に相当する部分です。つまり遺伝病を持った人達に対し子供をもうけることを禁止するなど、国家による厳しい管理によつて人為的に淘汰を進めていこうとする立場です。

逆に③はですね、闘争、淘汰が国家または人種のレベルで自由に行なわれるべきだという立場ですが、具体的にはこれは自由貿易主義に相当します。今、日本は自由貿易世界で競争上かなり有利な点を持っているらしく、貿易黒字が年々増えていく状況にあるわけです。こういう自由貿易主義、あるいは戦争といったものもここに入

るかもしれませんが。④は、人為的に国家または人種を淘汰してしまうという行為を指します。歴史上、その具体例は数少ないのですが、例えばナチスドイツのユダヤ人虐殺、つまりユダヤ人をこの地球上から抹殺してしまうとしたあの残酷な行為がこれに相当します。

このように「淘汰↓生存競争↓自然選択」というメカニズムを放任しておくのか人為的にするのか、あるいはそのレベルは個人なのか集団なのかという二つの軸で大まかに四つの社会ダーウィニズムの類型が考えられたわけです。こういう社会ダーウィニズムもまたダーウィン進化論とともに十九世紀後半のイギリスで生まれ、世界中に広まりそれぞれの国で受容されたわけです。

次に、この進化論の受容という学問分野の状況について少しお話しします。私自身はこのテーマを国際比較の一つの分野だというふうに考えています。要するに進化論への反応というのは国によって、あるいは文化や宗教によって異なる、この違いは一体どこから出てくるのかという問題です。

私の場合は特に日米比較をこれから進めていこうと思つてます。日本では大学の講義科目として、例えば『ダーウィン革命』というふうな講義が私の知る限りではまずないと言えらると思うのですが、アメリカでは『ダーウィン革命』あるいは『進化思想史』という科目が思想史あるいは歴史の講義科目として成立しています。大きな大学ではほとんどこういう科目があります。これは一つにはアメリカではキリスト教の影響が非常に強く、『旧約聖書』の最初に書かれている『創世紀』をそっくりそのまま信じている学生がかなりいると言います。特に南部出身の学生に多いと言われています。アメリカ大統領ビル・クリントンの出身地アーカンソー州などは非常にその傾向が強いところなんですけれども、そういう学生が新入生として入ってくるものですから、大学の先生、特に科学を専門としているような先生には彼らに何とか正しい知識を与えたいと思うらしいのです。それを教育の一

つの使命と考えているわけですね。つまりそれくらい進化論とキリスト教（特にプロテスタントの福音主義派の人達）との間に緊張関係が存在しているんですね。

ところが日本には宗教と進化論との間にそれほど緊張感がない。日本人は進化論自体をすんなり受け入れていゝる。とにかく日本では進化論関係の翻訳ものはかなりの売れすじになるそうで、日本人は進化論好きだという印象を持つ研究者が多いということです。しかし実際に進化論がブームになっているかという点、そうでもないようです。自分のことで恐縮ですが、私自身は日頃進化論のことなどあまり頭に留めていません。これはかなり一般の人々に通じる態度だと思います。講義中、時々学生に尋ねてみますと、「進化論というのは聞いたことはあるけれどもその中身はよく知らない」という人達がいゝます。このように多くの日本人には、無関心の傾向が強いと言えます。ですから、この点だけをアメリカと比べるだけで国によって進化論への反応が大きくちがうことがはっきりします。これは非常におもしろい比較のテーマであるというふうに私は考えております。

にもかかわらずその研究状況はどうかといゝますと、アメリカ、フランス、ドイツそれからロシアあたりの各国別の受容史研究がかなり蓄積されているんですが、国際比較は全く手つかずの状態なのです。しかしだからといって研究者の関心が薄いというわけではありません。現在、日本をはじめアジアの事例は英語では全くアベイラブルではありませんので、アメリカの研究者は早く英語で日本や韓国や中国の事例を紹介されるのを待ち望んでいる、そういう状況です。日本の研究状況を見ると、思想史それから科学史の先生方はこのテーマで一度は論文を書かれているようで、研究の数はわりとあるんです。社会学と哲学の学説史、そして思想史、科学史そういった分野で扱われてきてゝいます。今日はそういったこれまでの研究を紹介しながら、これまでの研究で見逃されてきた、特に日本に固有だと思われゝるような受容についてお話ししたいと思ゝいます。

それではこうした基本事項を踏まえて、明治の頃の日本にダーウィン進化論や社会ダーウィニズムがどのように導入され、一体どういうふうに使われていったかというお話を始めたいと思います。

日本に進化論が導入された頃というのは、おそらく一八七〇年代末のことで、明治十年前後だと言われております。これは確かな記録がありませんので大体この頃だと言われていると思います。当時の日本の状況については皆さんもちろんご存知だと思いますが、明治の新しい政府は難題をいくつも抱えておりました。第一に急速な近代化。とにかく西洋列強の植民地にされることなく独立を維持していくために一刻も早く高いレベルの富国強兵、殖産興業を実現しなければならなかったのです。第二に国内政治体制の模索。西洋の軍事力に脅されている中で急速な近代化を実施するわけですから、かなり集権的な体制をつくらないとだめだったんですね。そこで当然民主主義勢力と国家主義者との間に対立が起きたわけです。それから第三に、不平等条約の撤廃ということですね。西洋との間に結ばれていた不平等条約の撤廃は外交上の悲願でありましたが、その実現のためには内地雑居問題をはじめとしてクリアしなければいけない問題がたくさんあったのです。ほかにも問題はありましたが、とくに今あげた三つの問題はいずれも進化論の受容と大きく関わることになりました。

さて、進化論の導入には書物によるものや留学生によるものなどいろいろな経路が考えられます。そのうちおそらく一番大きな経路といえば、エドワード・シルベスター・モースやアーネスト・フェノロサなどのお雇い外国人による教育・普及だったと思います。彼らはともにアメリカのハーバード大学の卒業生で、東京帝国大学で教鞭を取り進化論を教えたのです。ここで、明治政府がなぜ彼らを雇ってまで進化論を講義させたのかという疑問がでてきます。この問題については、明治政府がキリスト教勢力の拡大を非常に懸念していて、進化論の普及によってキリスト教勢力を牽制しようとしたという見方さえあります。しかも、そういう目論見があったからこ

そ、明治政府は日本美術を持ち出すという彼らの悪行を多少大目に見ざるをえなかった、つまり進化論の講義と引き換えに多少の罪を許したと、そこまで言ってる人もいます。

実際マサチューセッツへ行き、ボストン美術館それからセラムのピーボディ・ミュージアムを訪れると、モースやフェノロサの持ち帰った美術品をたくさん見ることが出来ます。そこへ行って私は驚いたんですが、ああいう美術館ではほとんど毎日観光客用のツアーが組まれています。僕はそれについて行ったわけですね。するとそのガイドさんは、モースやフェノロサの違法行為にはまったく触れず、「当時の日本人は美術の価値がまったく分からないから、おいしいお菓子をあげると何でも持ってきた」などと説明しているんです。それを聞いて私は非常に腹が立って不愉快になったことを覚えています。

さて、話を元に戻しまして、日本は急速な近代化を開始した頃に進化論を導入したというところから続けますと、日本はその進化論をおもに社会理論として導入したのです。つまり、ダーウィンが生物理論として構築した進化論を当時の日本の知識人たちは社会の進化を説明する理論として受けとめたのです。これは進化論受容の比較という観点から見て、大きな特色と言えますが、その理由はいくつか考えられます。

第一に、おそらく当時の知識人や官僚にとってはいかに早く日本社会を改良し西洋に追いつくかということが最大の問題だったんでしょう。ですから「エポリューション」という言葉のなかに彼らは生物変遷の理論ではなく社会進化の秘訣を読みたろうとしたのです。つまり、そういうものを彼らは待ち望んでいたわけですね。非西洋後発国で進化論を導入した国では、それが社会の変化を説明する理論として受け入れられる傾向があると言われています。しかも、この傾向は非常に強いと言われています。

社会理論としての導入のもう一つの理由として、当時の自然科学者、生物学者が進化論に対して比較的無口だっ

たということを挙げることができます。一つには、やはり日本には当時進化論を生物理論として評価できるだけの科学の蓄積、生物学の蓄積がなかったからでしょうか。ダーウィンの生物進化論自体は人文社会系の知識人も理解できる程度のものでしたが、それでも当時の日本にはその科学的価値を評価するだけの實力はまだなかったと思います。あるいは、ダーウィンが進化論を発表してから進化の事実、生物は変化してきたんだという事実については広く認められるようになったのですが、逆にその変化のメカニズムとしての自然選択説は非常に評判が悪くなる一方だったんですね。おそらく日本の生物学者のなかにもそれに気づいている人たちがいたと思います。そういうこともありまして当時の日本の生物学者は進化論に対し消極的な態度をとり、それが社会理論としての進化論の流行を引き起こしたというわけです。

それでは次に、この社会理論として導入された進化論がどういう立場の人間にどういう目的で使われたかという問題に入っていきたいと思います。私はここでは三つのケースを取り上げてみたいと思います。第一に一八八〇年代の「自由民権論争」、第二に一八九〇年代の「内地雑居論争」、そして第三に二〇世紀最初の一〇年間の「国家主義者による集団主義道德の形成」という三つのケースについてお話ししましょう。

自由民権論争に進化論が使われた経過はこれまでの研究ですでに明らかにされております。当時、馬場辰猪や植木枝盛といった自由民権派の人たちは普通選挙による国会開設を唱えていましたが、その論拠となる考え方はいわゆる「天賦人權説」だったのです。これは簡単にいいますと、「人間は生まれながらにして平等である、平等な権利を持つ」というものです。これに対して加藤弘之という初代の東京大学総長が、ダーウィン進化論に基づいて天賦人權説を攻撃したわけです。加藤弘之は「人間には知力体力に個人差がある。だからわれわれは平等であるはずがない」というふうな非常に単純な言い方で、天賦人權説は間違っていると考えました。しかもここで

止めておけばいいものを、彼はさらに進んで「天皇家の祖先はフィッテスタ、最適者として日本支配を確立した。従って天皇家の子孫も適者で彼等が日本を支配してきたことは正当化される」と断言してしまったのです。

これに対しては自由民権派の論客が即座に反撃を開始しまして、彼らも「生存競争・適者生存」というダーウィン進化論に基づいて普通選挙や民主主義を擁護する論陣を張ったわけです。なかでも注目に値する反論は、「将来、今の天皇よりもっと優れた人間が現われた場合、天皇はその人に自分の地位を譲るのか？」という御用学者加藤への皮肉な質問としてあらわれました。加藤はロジックの上で負け、恥をかかされました。権力を後ろ盾にしていますから実際にダメージを被るところまでは行かなかつたのですが、とにかく御用学者としての面目を失ってしまったということがあつたんです。この経過を分析した戦後の学者は異口同音に、加藤の進化論理解が皮相なものであつたからこの敗北は当然だとしています。そして自由民権派の主張を正しい進化論理解に基づいたものとして評価しています。

私は戦後の研究者のこうした評価に反対しませんが、進化論の受容という観点からこの論争を見ますと、もつと別の重要な特徴を指摘できるのではないかと思います。つまりこの論争には進化論の使い方として、私の知る限りにおいて、日本に固有な論争パターンというものが見られるのです。

つまりこの論争における進化論の地位に着目しますと、それは *One of Them* ではなかつたんですね。進化論という理論は証明ずみの真理として一段上にあつて、論争者たちは自分の言いたいことがどれだけ進化論に合致しているかを競い、ついでに相手の言っていることがどれだけ進化論と矛盾しているかということを示そうとしました。そしてそれによつて論争の勝敗を決めようとしたわけです。ですから進化論それ自体の正否が問われることはまづなくなつたのです。先ほどお話ししましたように、当時の日本に進化論を評価するだけの学問的な

伝統や蓄積あったかどうかということと密接に関わつてると思うんですけども、これは日本における進化論の受容、つまり進化論を使った論争における特殊なパターンとして指摘できるのではないかと考えております。しかも、このパターンは進化論の理解と使用目的から加藤を批判し自由民権派を評価した戦後の学者たちの態度にもいぜんとして受け継がれていると言えるかもしれません。

私はこのように進化論そのものの是非を問う視点が不在であつたことに多少の物足りなさを覚えるのですが、例えばアメリカには継続して進化論を疑い続けているキリスト教徒の視点があります。アメリカのように宗教が進化論への懐疑において重要な役割を果たしてきた国はほかにもたくさんあると思われませんが、この点、仏教を始めとする日本の伝統的宗教はどのような状況にあつたか興味深いところです。

次に、進化論が使われた第二のケース、「内地雑居論争」に入りたいと思います。不平等条約の撤廃は明治政府の一大目標でありましたが、その実現のためには関税自主権の確立や領事裁判権の廃止といった重要な問題を解決しなければなりません。しかし今日から見ればそれほど重要ではありませんが、もう一つ重要な問題があつたのです。それが内地雑居の実現という問題でした。不平等条約を撤廃するためには外国人が日本の中を自由に歩いても安全だ、日本はもうそれくらいの近代法治国家になつたということを諸外国に示す必要があります。そこで当時の知識人たちの間にその是非や実施時期をめぐる活発な論争がおこなわれたというわけです。

一八八〇年代中頃から始まつたこの論争では、初めのうち、馬場辰猪や島田三郎などの進歩的開明派といわれる人たちが内地雑居の即時実施を主張していました。というのは、内地雑居が実現し外国人が、といつても白人のことですが、たくさん入ってくれば、それだけ彼等から刺激され日本の近代化が促進されると思われたからでした。これは一言でいえば鹿鳴館外交の考え方ですね。キリスト教徒もそれに賛成しました。言うまでもなく、

欧米人が入って来れば来るほどキリスト教の布教に有利な環境ができるからです。

こういった即時実施論に対して、一八八〇年代末から東京大学の井上哲次郎と加藤弘之が時期尚早論を、そして保守派の西村茂樹や仏教学者たちが反対論を展開し始めましたが、この井上哲次郎や加藤弘之の時期尚早論にダーウィン進化論が使われたのです。

彼らはまず「内地雑居というのは一種の人種間闘争だ。内地雑居を実施すれば日本は人種と人種が、つまり日本人と白人が争う生存競争の場になる」というふうに言うんですね。この次が私にとって非常におもしろいんですが、「生存競争の結果日本人は淘汰されてしまう」と続けるんです。彼らはもちろん御用学者ですし、国粹主義者でもあったわけですから、日本人を劣等視するようなまねはできなかったはずです。にもかかわらず敢えて「日本人は白人に比べると劣っているから淘汰される」と断言したのです。井上哲次郎は、「日本人は他のアジアの人間に比べれば少しは優れているかもしれないけれども、白人と比べれば南洋諸島の小さな島の原住民と同じレベルだ」と言いました。加藤弘之に至っては、「内地雑居が実現すれば日本人は劣っているから、経済資本は白人に牛耳られ、労働市場は勤勉な中国人に奪われてしまい、日本人の居場所がなくなる」とまで言いだす始末でした。加藤が今の日本経済の発展ぶりを見ればびっくりすると思うんですが、しかし当時加藤は本気で心配していたのです。従って彼らの結論は「できるだけ雑居を延期しその間に国力をつける、あるいは日本人を教育し改良する」ということになったわけです。

ここで井上哲次郎や加藤弘之のダーウィン進化論の使い方、この場合社会ダーウィニズムの使い方といってもいいですが、それを日本の進化論受容という観点から見ますと、二つのことに気がつきます。第一に、彼らは社会ダーウィニズムの中でも特に人種主義と結びついた社会ダーウィニズムを受容していたということです。それ

は白人優越主義と離れがたく結びついた社会ダーウィニズムと言えるでしょう。これを使って彼らは時期尚早論を展開していくわけです。第二に、これが日本的な特徴だと思われるのですが、その白人優越主義と結びついた社会ダーウィニズムを有色人種である彼らは「弱者」として受け入れたということです。それは淘汰する側ではなく、淘汰される立場にたったダーウィン進化論の受容とも言えます。元来、社会ダーウィニズムはしばしば「強者の理論」だと言われてきました。この理論に従えば、強い者は「おれは強いから勝った、おれが勝ったのは強いかからだ」と言えるからです。ところが今説明したように、井上や加藤の受容は「弱者としての受容」、つまり自らの民族を弱者としてあるいは肉体的に劣ったものとして位置づけた社会ダーウィニズムの受容でした。なるほど、確かにこういう受容の仕方もあるなあとというふうに私は思ったわけです。

このような「弱者としての受容」は白人が支配している国ではまず見られないでしょう。例えば、ドイツは「強者」として社会ダーウィニズムを受け入れています。ゲルマン民族の優秀さを信じて戦うだけでよかったわけです。ですから従来の研究は「強者の論理」という意味についてのみ社会ダーウィニズムの受容を扱ってきました。しかし日本、そしておそらく他のアジアの国々を研究するときは、「強者の論理」としての意味だけではなく、「弱者がそれをどのように使ったか」という視点をも含めてとりかかると必要があると思います。また、アメリカには支配民族のアングロサクソンだけではなく、有色人種もいれば白人の中でもかなり下の方に位置している白人もいるわけです。彼らはダーウィン進化論に対して一体どういう態度をとったのでしょうか。こういう問題を日本の例をもとにしながら改めて見直すことも可能になるのではないかと思います。とにかく、適者生存の原理というものは必ずしも強者のものではないということを『内地雑居論』における加藤や井上の進化論の受容が表わしているというふうに私は考えます。

次に社会理論として導入された進化論が使われた第三のケース、つまり国家主義道徳の形成についてお話ししたいと思います。一八九〇年代前半の内地雑居論争で日本人を弱者として位置づけた加藤や井上は、続いて一八九〇年代後半から国家主義道徳あるいは集団主義道徳の形成という仕事に入って行きます。彼らは国民の間いわゆる忠君愛国の精神を醸成しようと努力したわけです。これはちょうど日清日露の両戦争の時代に当たりますから、その意味で彼らがそのような道徳論を展開したのは当然だったかもしれません。ところが、その際に彼らはまたしてもダーウィン進化論の考え方を使ったわけです。

例えば井上哲次郎は、「有意淘汰」説というような自分流の淘汰説を唱えました。彼によれば、「戦争において勝敗の決め手となるのは肉体的、物理的な優劣だけではない、もっと重要なものがある。それは相手に勝とうという意志の強さだ」というのです。このように内容自体はわざわざ説明するまでもなく簡単なものですが、そもそも自然淘汰というプロセスは神のような超越的存在も含めて意志とは一切かかわりあいなく進行するものです。ところが井上はそういう性質のプロセスに敢えて意志を持ち込み、それによって勝敗の決まる生存競争を「有意淘汰」と名づけたわけです。

他方、加藤弘之は「自力淘汰」説を唱えました。これは私の言葉ではダーウィン進化論と武士道との融合になります。英語で説明するときにはウケを狙ってサムライ・ダーウィニズムというキャッチ・ワードを使います。加藤はダーウィン進化論を次のように修正しました。すなわち、ダーウィンの「個体間の生存競争」という考え方を「国民の間の天皇への忠誠競争」という考え方に代えます。そして「適者生存」という考え方を「適者殉国」という考え方に代えます。彼は「適者殉国」などというヘンな言葉を実際には使いませんでしたけれども、とにかく忠誠競争において最終的に勝利を得るものは誰かというところ、戦争において天皇陛下のご恩に一死をもって報

いる、そういった殉死者あるいは殉国者が勝利者だというふうなことを言い出します。彼によると、こうした考え方が国民の中に定着すれば、いわゆる忠君愛国の精神がひとりりでほとんど国民の間に広がっていくというのです。彼はこの道徳の醸成の過程を「自力淘汰」と名づけました。この「自力淘汰」説には明らかに当時日露戦争を前にしてブームとなっていた武士道精神の影響が見られます。というのは、ご存じのように武士道には加藤の「自力淘汰」説の中核となる忠誠競争と殉死の賛美という二つの要素が同居しているからです。要するに、加藤は武士道という伝統思想で修正することによって、はじめてダーウィン進化論を天皇制支持のための盲目的な服従イデオロギーに作り変えることができたわけです。私はこの意味で加藤の「自力淘汰」説を重要視し、サムライ・ダーウィニズムと名づけました。

進化論受容の国際比較という観点から見ると、こうした伝統思想によるダーウィン進化論の修正はとても興味をそそられるテーマです。国がちがえば伝統思想もちがうわけですから、いろんな国でいろんな修正が見つかるのではないのでしょうか。しかもこの伝統思想による修正は偶然に生じるわけではなく、たいていの場合、そうせざるを得ない状況によるものと言えます。例えば、加藤の「自力淘汰」説の場合、すでにとりあげた内地雑居論争で彼は日本人は肉体的に劣っていると決めつけてしまいました。つまりそういう肉体的あるいは物理的な領域で西洋に打ち勝つ道を自ら閉ざしたわけです。となると西洋に挑戦していこうとするとき一体どういう領域が残されているのでしょうか。彼にとつては道徳の領域しかなかったわけですね。ですから彼はその道徳領域でなんとか肉体的弱者である日本を道徳的強者へと変身することによってその弱点を補おうと考えたわけです。そしてその変身のためのイデオロギーを作るときに彼はダーウィンの淘汰という考え方に固執したんですね。

ですからここではダーウィン進化論は単なる強者の論理ではなくてむしろ弱者が強者へと変身するための論理

になつていきます。近代日本における進化論受容の事例はまさにそれを表わしているのだと私は考えています。

それではなぜ加藤の「自力淘汰」説が当時の日本の「弱者から強者への変身」につながるのかという問題が出てきます。残念ながら加藤自身がこの問題をきちんと説明することはありませんでした。しかし幸運にも丘浅次郎という生物学者が加藤の代役を果たしています。彼は明治後期にダーウィン進化論を日本に普及するためにたくさんの著書を著した人ですが、その中に一九一九年の「劣れる民族の損と得」という短いエッセイがあります。重要部分を抜粋してきましたので、ちょっと読みます。

……今日の時世に最も心強いのは、文明の進歩においては他の民族に優り、服従性の退歩においては、他の民族におくれている民族であろうが、この二つの性質は互いに相容れぬゆえ、同一民族が同時に両方を兼ね兼ねることはとうていむずかしい。独力で文明を進め得るような民族ならば、他に先んじ坂を下るゆえ、服従性が他に先んじて退歩し、これに伴う危険が第一着に現われる。また服従性がいつまでも退歩せず、依然として坂の途中に止つて、従来の制度で満足しているような民族ならば、決して文明の魁となるわけにはゆかぬゆえ、その方面で他の民族から圧迫をまぬがれぬ。前者は優れる民族の恐れるところであり、後者は劣れる民族の苦しむところである。この間に立つてひとり幸運なのは、文明においては優れた民族の後を追うだけの模倣力を有し、服従性の方は、なお半開の状態にとどまつて、これを多量に有する民族であろう……。

丘のエッセイの中では、言うまでもないことかもしれませんが、文明が進歩し国民の服従心が退歩した国とは西洋諸国を指し、文明は多少遅れているが模倣力を有し、国民の服従心が依然強い国とは当時の日本を指しています。そしてこの二種類の国を比較し、弱肉強食の国際関係を生き抜くとき一体どちらの国が有利かを議論しています。そして丘は西洋と日本の当時の歴然とした力関係を逆転させ、日本の方が有利だという結論を出してい

るわけです。丘のこの立場から加藤や井上が行なった集団主義道徳の形成の意義を考えますと、それは服従性の後退を食い止めるということになりますね。加藤の努力にはそのような意味合いがあったわけです。

このように加藤や丘はかつて日本を「劣等人種」と位置づけた社会ダーウィニズムを見事に切り返し、同じ理論を修正して日本には将来「優等人種」に変身する潜在力があることを示しましたが、だからといって我々はこの切り返しに喜んでばかりいるわけには行きません。

確かに、進化論にはつねに「明るい将来」を描き出すという魅力があります。しかし同時に、加藤による国家主義道徳の形成には別の恐ろしい側面があったことを忘れてはいけません。将来は現在より良くなるなどと思つて浮かれてはいられない部分があるわけですね。それはどういう側面かと言いますと、今生きている個人の尊厳や生命の価値を最小限にしてしまうという側面です。そもそも進化論によれば、未来の生物はより進化した生物ですから、現在生きている我々は将来につながる中継点にすぎない、だから将来のために現在の生きものが犠牲になることがあっても仕方がないということになります。実際、加藤はより進化した将来の日本のため死ぬと当時の若者に教えているわけです。「より進んだ日本のために」というふうな考え方は、まさに、進化論の個人の価値や生命の軽視という性質をその極限にまで推し進めたものだと言えます。加藤は進化論がもつこの性質を国家主義道徳形成のために非常にうまく利用した恐ろしい男だと言えるかもしれません。

これまで社会学論として受け入れられた進化論が近代日本において使われた三つのケースをおもに加藤弘之や井上哲次郎などの国家主義者を例にとりながらお話ししてきたわけですが、進化論を受け入れた人はもちろん彼らだけではありません。ほかに社会主義者やキリスト教徒もいました。そこで少しだけですが、他の例についてもお話ししておきたいと思えます。

近代日本の黎明期の社会主義を代表する人物、幸徳秋水もやはり進化論の影響を受けました。とくに社会主義にいたる社会発展の道筋をマルクスの言葉によってではなく、ダーウィン進化論の言葉で説明しています。これは本当にそう信じていたのか、あるいは難解なマルクスの説明を意識的に避けたのかどうかはわかりませんが、とにかくダーウィン流に「資本家と労働者との間の階級闘争は生存競争で、労働者の方が数も多いし優れているので労働者が勝ち、やがて労働者の社会がやってくる」と説明しています。こういう説明は一般大衆にとって、生産手段の所有・非所有に基づくマルクスの発展段階説よりもはるかに分かりやすいのではないのでしょうか。ですから進化論にどこまで心酔していたか判断するのは難しいかもしれませんが、とにかく幸徳が社会主義実現のための道筋を進化論に沿って説明していたのは事実です。

また当時社会主義者は、どこの国でもそうだったと思うんですが、経済的な平等の達成を唱えていましたから、社会進化論者から次のように批判されました。つまり「経済的な分配の平等を達成すれば、経済競争がなくなってしまう。結果として、社会を進化させる原動力もなくなってしまうではないか」という批判です。

この批判に対して彼らは「経済的・物理的な競争を廃止しても、精神、道徳、文化の領域における競争がある。このような競争も社会を進化させる原動力になる」というふうに答えました。そして彼らが具体例としてひきあいに出したものが武士道だったのです。ご存じのように江戸時代、サムライ階級は経済競争から開放され、食料は保証されていました。すなわち経済的な競争から解放されていたからこそ、サムライたちは武士道という高度に発達した精神文明を作り上げることができたというのです。ですから経済的な競争がなくなったからといって社会の進化がなくなるわけではないと答えたわけです。

このように進化論の立場からの社会主義批判に刺激され、当時の社会主義者は武士道を進化論の文脈で解釈し

直したのです。おそらくこの社会主義者の武士道解釈が先ほど触れた加藤弘之による武士道と進化論との融合のヒントになったのではないかと私は思ってるんですけど、もしそうだとすれば、これは非常に皮肉なことだというふうに思います。なにしろ、社会主義者がその宿敵国家主義者に思想的ヒントを与えたのですから。その点を別にしても、両者の武士道解釈のちがいに多少の皮肉を感じざるを得ません。つまり、幸徳は進化論の文脈で武士道を非常にすばらしいものとして捉えましたが、それをヒントにした加藤は武士道をとんでもないものに作り変えてしまったということです。盲目的な服従精神と暴力的な戦闘精神の醸成のためのイデオロギーに変えてしまったわけですから、非常に皮肉なことではなかったかと私は思ってるんです。

次に近代日本の有名なキリスト者内村鑑三についても少しだけ話しておきたいと思います。ご存じのようにキリスト教と進化論とは相性が悪いのですが、彼の場合キリスト教徒でありながら『種の起源』と『聖書』が余の最大の愛読書である」とずっと言い続けてきました。おそらく一九三〇年前後に亡くなっていますが、彼はその直前の一九二五年頃までずっとそう言い続けていたはずですよ。つまり彼は彼なりに『聖書』の創世紀の記述と進化論の説明とをどうやって調和させるかという問題にずっと苦しみ続けたわけです。その間、『聖書』の記述の中に進化論の説明と一致する部分を探し、それについてたくさんのものを書き残しています。

しかし結局のところ彼のそういう努力はあまり報われなかったと言つてよいと思います。というのは、最終的に内村は進化論と訣別しキリスト教根本主義へ回帰していくという経過をたどっているからです。ただ、おもしろいことに、内村のような変化は太平洋の向こう側のアメリカでも見られました。一九世紀の後半のアメリカにはクリスチャンダーウィニストと呼ばれるような人たちがいました。彼らは聖書の創世紀と進化論との融合一致を示そうと努力していましたが、一九二〇年代になるまでには完全に根本主義へと転向しております。ですから、

内村がアメリカの事情を知っていてそれに同調したのかもしれませんが、太平洋の両側でキリスト教徒には同じような変化が見られたということになりす。

それでは最後になりましたが、近代日本の代表的な仏教学者であります井上円了の進化論に対する反応についてお話ししたいと思います。彼の場合進化論とのお付き合いは大学時代からあったと思われれます。彼は大学時代から生物の進化は動かすことのできない真理であるというふうに考えていたようです。明治の生物学者石川千代松の全集第四巻に『老科学者の手記』という短い文章がありまして、そこで石川は井上円了について触れていきます。関連する部分を抜粋してきましたの読んでみます。

……井上円了君、君は私より少し遅れて東京大学を出られたと思つて居ます。確か君が出られたのは明治十八年であつたと覚えて居ます。専門の学問は違つて居たが在学中でも能く話をした事は君もよく覚えて居られたでせう。其話の多くは進化論に關係した事であつたと覚えて居ますが、私が明治二十二年に欧米から帰つてきた時に、君の口頼みで哲学館で進化論の講義をした事をも覚えて居ます。あの時には君も熱心に私のツマラナイ講義を聴いて下さつて、当時にも其後も君が進化論の事柄に就いて私に質された事で、私が君に終始感服して居た事は、君は他の哲学者連と違つて能く事實に重きを置かれて居た事であつた。或る日君の哲学館で易の先生と私と一緒に課外講義をした後で、其先生と小生との間に一寸議論が起こつた時にも、君は事實だから誰が何んと云はうとも、進化論は今日では最早動かす事のできない真理であるだらうと述べられて、私の説に加勢して下さつた事も今まだ覚えて居す……。

このように井上円了は明らかに進化論を受け入れています。ただし「生存競争」や「適者生存」とかいったダーウィン進化論をどれだけ受け入れていたかは分らないのですけれど、進化という事実を早い頃から受け入れてい

たのは確かです。

それでは彼は実際にどのような使い方をしていたのでしょうか。これからその具体例を三つお話したいと思います。第一は、あまり重要ではないかもしれませんが、「適者生存」の法則により当時の日本の仏教勢力の衰退とキリスト教勢力の興隆を説明し、効果的に仏教徒に危機感を煽っているということです。私は詳しい歴史を知りませんが、江戸時代後期から仏教勢力の停滞傾向が続き、明治維新になってその停滞に追い打ちをかけるようにキリスト教がどつと入ってきたという話を聞いています。したがって井上は『真理金針 初編』に「適者生存の原理によつて仏教はキリスト教に淘汰されるかもしれない」というふうにダーウィン進化論を使つて他の仏教徒に警告を与えたわけです。その部分をちよつと読みます。

……凡そ事物其何たるを問わず、古今変更せざるもの少し。是何ぞや。其時の事情に適するものは自ら存し適せざるものは自ら廃す。是れ理の当然にして、所謂適種生存の理法なり。西洋にありても古代種々の教法ありて、耶蘇教独り古来の教法にあらず。然るに其古代の法は俄に衰滅し、耶蘇教は一時に伝播し、終に今日の如き隆盛を極めたるに至れり。是又適者生存、不敵者不生存の理に本づく者にあらずや……。(『真理金針 初編』)

余談になりますが、彼はここで「適者生存」という用語の代わりに「敵種生存」という言葉を使っています。

当時はいろんな言い方があつたと思いますが、こういう言葉がいつごろからできたかという疑問や、また誰が作つたかという疑問もまだ解けてないのです。ほかに「優勝劣敗」という言葉もあります。これは加藤弘之が「適者生存」と同義で自分が作つたと言っている言葉です。しかし、「優勝劣敗」は「適者生存」や「適種生存」とちがつて、競争を生きるか死ぬかというレベルだけでなく勝ち負けのレベルでとらえられる概念で、その意味では非常に日本的な訳語かもしれません。

話が横道にそれましたが、次に井上円了が進化論を使った第二の例、キリスト教批判について話を進めたいと思います。地球や生命の歴史に関してキリスト教と進化論が対立することははっきりしていることです。キリスト教の創造論に従うと、この世界は今からおよそ六千年前、正確にはBC四千四年に神によって造られたことになっています。創造の日は何月何日何時分までわかっています。ですから意地の悪い生物進化論者はその何時分というのはグリニッチ標準時なのか日本時間なのかと皮肉るわけです。他方、進化論に従うと、地球の歴史は何十億年というとても長く長い時間を経ていることになります。ですから、創造論と進化論は一方がほんとならば他方がウソになる関係にあるわけです。井上円了は仏教学説を擁護するため進化論の立場から、聖書の中に見られる矛盾を徹底的に攻撃しています。例えば『真理金針 初編』では次のように書かれています。

耶蘇教の創造説は理学の進化論と両立す可からざること。(甲)創造説は蛮民原人の妄想説にして、進化説は文化開明の実験説なること。(乙)創造説は古代未開の時に当ては世間一般に之を信ぜしと雖世の進歩するに従い、其説漸く勢を失い、進化説日を追うて盛なるに至る。是を推して論ずれば、時來耶蘇教を全く廢滅に帰する日あるべし。(丙)創造説は万象變化の原則に反対する事。其原則とは一因あれば必ず其果あり。一果あれば果実其因ありて、神と雖も無より有を生じ、物なきに物を造り、又有を転じて無に帰す可からざる原理を云う。(丁)進化説は目前事々物々をとりて証することを得るも、創造説は古代の遺書について証するより外なし。(戊)進化説は啻に事実を以て証すべきのみならず、理論の原則に合格すること。(己)近世の諸学、生物・生理・天文・地理・物理・化学・社会学皆進化説を証明構成するに至ること。(庚)今日新に発見する所の諸説諸論は、皆進化論を証するの事実にして、創造説を排するの論拠となすに足る。天帝と時空の關係明らかならざること

……。(『真理金針 初編』)

さて、これまで述べてきた「適者生存」の原理の使い方やキリスト教批判における井上円了の進化論は、まさにそのまま受け入れたなんの変哲もない進化論でした。それだけだと私としては「あまりおもしろくなかった」という結論になってしまおうのですが、そうではないのです。井上はキリスト教批判から一歩進んで、仏教の優位性、科学性を示すために仏教と進化論の融合をはかろうとします。そしてそれに見事に成功しています。時間の流れについての西洋の考え方にはもともと直線的な流れと循環的な流れの両方があったのですが、どちらかと言えば、直線的な流れの方が主流と言えるでしょう。とくに、進化論は時間を直線的な流れとしてとらえています。それに対して仏教では循環的な時間の流れの方が主流と言えるでしょう。井上はこの両者の対立を調和しようとして試みたわけです。

先ず彼は宇宙の変化には進化だけではなく退化があると言います。西洋の無限かつ直線的な進化論に対して、井上を始めとする日本の仏教徒は進化はいつしか必ずその終局点に達し、その後退化を来すと考えました。つまり進化があれば必ず退化があるという考え方で西洋の進化論的な時間の観念に批判を加えます。その上で井上は進化と退化を合わせて大化と名づけたのです。この部分を「破唯物論」から引用しますと、次のようになっていきます。

……地球其物に退化滅盡の時があるから人類を始め一切の生物に滅盡期のあるは申すまでもない……。古語に所謂盛なるものは必ず衰え、生あるものは必ず死に帰すとは、人類社会の常則のみならず、宇宙の常法でありて、仏教の世界観は全く此点より起ると考えます。此の如く此大世界が星雲より進化して其極に達し、漸く退化して此終期に達するを之を世界の大化と名づけます。其大化の初を開闢と云い、其終を閉合と云い、或は開きて森然たる万象を現示し、或は合して寂然たる空境に帰し、一進一退一開一合を完了するは実に世界の一

大化であります……。〔破唯物論〕

さらに進んで井上は、「時間・空間の無限性」と「物質不滅・勢力恒存の法則（エネルギー保存の法則）」という近代科学の成果を援用し、大化の始めと終わりはともに「高熱の星雲」状態であり、大化のサイクルは「高熱の星雲期から進化、退化、そしてまた高熱の星雲期」というプロセスを無限にくり返すと説明しました。

したがってこの宇宙は進化と退化からなる大化を無限に繰り返すことになるのですが、井上は最後に大化どうしの関係について考えています。井上によれば、前の大化で起こったことは次の大化になんらかの影響を及ぼす、つまり大化どうしは一種の因果関係にあるというのです。しかも、大化と大化の間には上下の区別があり、「大化の繰り返しは全体として上に向かっていく」というのです。時間的に後の大化の方が前の大化より進化していると関係づけ、井上はこの大化の上向きの繰り返しを大進化と呼んだのです。この考え方は私にとって非常に面白いものです。というのは、この考えは循環しているものが上へあがっていくというふうに、まさに仏教的な時間の循環概念と近代西洋的な時間の直線的概念を見事に折衷しているからです。こういう受容に出会うとほんとうに私自身もつとつと詳しく調べてみたいという好奇心に駆られます。

このように、井上に見られる進化論と仏教学説の融合は、仏教が他の宗教と比較すると理論的なレベルにおいても進化論との相性が良いかもしれないという可能性を示唆しているのではないのでしょうか。確かに明治の政治的状况を見ると、国家権力が進化論を使ってキリスト教勢力を牽制しようとする動きがありました。したがって仏教勢力は多少の無理をしても進化論に身を寄せた方がよいと判断していたかもしれません。実際、井上のキリスト教批判などはそのような判断の具体例と言えるでしょう。しかし、仏教と進化論の結びつきは単に政治的状况の結果だけでなく、理論的な相性あるいは親和性によるものであるという可能性が非常に高いと思われる。

今後この問題の研究に進展が望まれるところですが、なにしろそれをやるには、それこそ井上の思想全体、仏教理論、そして進化論その三つに精通していなければなりません。これはなかなか難しいことですが、将来ぜひともこの井上円了記念学術センターの中からそういう問題にとりくむ研究者が生まれることを期待します。

最後にもう一つ問題を提起しておきたいと思います。確かに井上円了は生物が進化してきたという事実を受け入れていました。しかし進化のメカニズムを説明するため「生存競争」や「適者生存」といった暴力的な考え方に對し、彼はどのような態度をとっていたかという問題です。殺生を否定する仏教的な価値観から判断すれば、井上もダーウィン流の進化メカニズムの暴力的概念をどこかで批判しているのではないかと予想できます。しかし、井上が活躍した時代は戦争の時代でありましたし、「護国愛理」という「忠君愛国」に近いニュアンスのスローガンを掲げていた彼には戦争を肯定する世論をつくりださなければならぬイデオログとしての役割もあつたわけです。彼の「戦争哲学一斑」という本を開けば、非常に乱暴な予想で申し訳ないんですが、おそらく殉死や殉国といった集団主義精神がかなり強く前面に打ち出されているのではないかと思います。ダーウィン流の暴力的な進化メカニズムに對する態度いかによつて、井上の進化論受容像も大きく変わってくるわけですから、この問題についても今後研究を進める必要があると思われれます。

以上、たいへん地味な分野のお話でしたが、長い間ご清聴ありがとうございました。